

# 中世の郷土

(一)

前月まで古代の郷土について掲載しましたが、今月から中世の郷土について述べます。

## 第一節 鎌倉時代

### 一、鎌倉時代

中世は十二〜十六世紀の鎌倉・室町時代をさす。この時代は新興の武家がそれまでの支配者であった公家にかわって政権を握り、封建制度を築き上げていった時代である。

十二世紀後半、平氏政権の後をうけて源頼朝が鎌倉に幕府をひらいた。これから約一世紀半近い鎌倉時代を通じ、武家は公家勢力を排除していった。

寿永二年(一一八三)平氏の都落ちのあと、頼朝は京都の後白河法皇と交渉して、東国支配の実質上の承認を得た。ついで文治元年(一一八五)平氏の滅亡後、法皇が源義経に頼朝追討を

命じて失敗すると、頼朝は

軍を京都に送り法皇に迫って、諸国に守護や地頭を任命する権限と、一反当り五

升の兵糧米を徴集する権限を獲得した。こうして東国

を中心にした頼朝の支配は広く全国に及ぶこととなった。そして、ついに征夷大

將軍に任ぜられ、武家政権としての鎌倉幕府は名実ともに成立した。

### 二、守護地頭

幕府は侍所・政所(はじめは公文所)・門注所等の中央機関の整備を進めるとともに、地方には守護・地頭を置いた。

守護は原則として各国に一人ずつ、主として東国の有力な御家人が任命されて国内の御家人を指揮して治

安の維持と警察権の行使にあたり、戦時には国内の武士を統率した。

地頭は御家人の中から任命され、全国の荘園と公領に置かれ、その任務は年貢の徴集や納入、現地の管理、治安の維持であった。

頼朝の死後は、幕府の主権をめぐる激しい争いが続き、有力な御家人が亡され、北条氏の執権政治が世界的に続いた。

郷土備後国の守護としては、源氏が一の谷の戦で平氏を破った直後の元暦元年(一一八四)二月、土肥実

平が備前・備中・備後の守護に補任されている。これがいつ頃まで続いたか不明であるが、承久の変の後の貞応二年(一一二二)以前

に、長井時広が備後国の守護に任じられており、おそらく鎌倉時代末まで守護職を継いでいたと考えられている。南北朝期に入って、

細川・渋川・今川などの諸氏が任ぜられ、康暦元年(一一三九)山名時義が守

護となって以降は、一時細川氏が任ぜられたこともあったが、山名氏が代々守護に任ぜられたようだ。

地頭については、郷土神石郡においては公領地頭としての確たる史料はないが、わずかに古資料に名が見えるのが町内木津和、木津和城の木津和氏と、同じく龜石、大寄山城の岡田氏である。「西備名正」によると、

木津和太郎與助は頼朝時代に神石郡郡司に補せられて、当地に居住するようになり、承久の乱に北条義時に従って働きがあったとい

い、十五代にわたって存在している。のち毛利に従って長州に移ったが、その一族といわれるのが留まって今日まで家系を伝えている。

岡田氏は、源氏の血をひく岡田但馬守貞正入道が、鎌倉殿から甲奴・神石両郡の郡司に補せられ、当地

(龜石)に在住したものと

いわれる。のち岡田孫八郎員盛の、常光村・龜石村の地頭職としての名が見え

る。元弘の変で武家方にくみし、桜山軍にくみした郡内の諸城の城主に攻められて一族は滅亡した。

その他郡内で地頭として

の名が見えるのは、父木野五殿山城主楯原筑前守高平、上有井城主馬屋原備前

守忠宗、豊松村新城山城主内藤河内守実豊、神石町高

光馬場城主高尾九郎次郎元行らである。

地頭職代としては、豊松村有木中山城主有木中務丞頼弘らの名が見える。

(以下次回)

三和町文化財保護委員

松 井 正 夫

### 【参考文献】

井上光貞「日本史」

広島・歴史と文化

広島・史蹟郷土史

神石郡誌統編

広島県の地名

郡誌統編引用

(桜山朝臣詳伝)

# 中世の郷土

(一)

## 三、元弘の乱

正中元年(一)、三二四)後醍醐天皇は幕府を討伐しようとして、日野資朝を関東へ、日野俊基を紀伊に送り、討幕を呼びかけたが、計画は事前に洩れ失敗した。いわゆる正中の変である。

続いて元弘三年(一、三三一年)天皇は再び討幕を計画されたがこれまた発覚し、日野俊基・文観・円親らは捕えられ、天皇は笠置山に逃れ、これに呼応して、楠正成らが擧兵したが、天皇は幕府方に捕えられ隠岐に配流された。この間幕府は北朝の光厳院を擁立したが、足利尊氏・新田義貞らの擧兵により、鎌倉幕府(北条氏)は滅亡した。これが元弘の乱と呼ばれるものである。

この元弘の乱において備後では、宮内(新市町)桜山城主桜山慈俊が、河内の楠正成の擧兵と呼応して兵

を擧げ、一族郎党を各地へ差し向けた、神石方面へはその子平四郎盛重の軍を進撃させ、備中地方の北条軍討伐にあたらせた。

この時郷土神石郡から桜山軍に加わり、慈俊朝臣の統率に従った武將は次の人々だと言われる。

相原筑前守高平。  
父木野村 御殿山城  
馬屋原四郎兵衛尉成宗  
上村 梨迫城  
馬屋原備前守忠宗  
上村 有井城  
江草右京亮忠安  
上野村 八頭山城  
内藤河内守実豊  
豊松村 新城山城  
内藤刑部左衛門清実  
(後) 龜石村 大寄山城  
有木中務丞頼弘  
有木村 中山城  
高尾九郎次郎元行  
高光村 馬場城  
高尾小十郎元広  
福永村 高尾城

村田左衛門兼光

新坂村 新免木路田城

村田左衛門三郎兼行

新坂村 新免木路田城

水野兵部太夫忠義

永野村 二子山城

以上の諸将であるが、このほかにも桜山軍に味方したものは多かったようである。

(右の内、馬屋原四郎兵衛尉成宗・馬屋原備前守忠宗は、初め北条方に興して笠置攻めに参加していたが、のち桜山軍に加わったといわれる)

しかして、この時神石郡内で北条党にくみした者は、前記馬屋原二氏のほか、岡田孫八郎員盛一族(龜石村龜石城(後の大寄山城))といわれる。また、備後史談には木津和太郎(木津和村木津和城)の名も見えているが去就は明らかでない。桜山朝臣は備後北部の北条党討伐のため、その嫡子平太郎盛重を大将として、これに日隈若狭守元政(現、芦品郡新市町金丸日隈城主)佐波越中守可実(福山佐波城主)を副えて神石方

面に進撃させた。

神石郡には桜山公の呼びかけに応じた前記の父木野村地頭職御殿山城主相原筑前守高平、豊松村地頭職新城山城主内藤河内守実豊、同舍弟刑部左衛門清実、有木村地頭職代中山城主有木中務丞頼弘一族、高光村地頭職馬場城主高尾九郎次郎元行、福永村高尾城主高尾小十郎元弘、永野村二子山城主永野兵部太夫忠義、並に三坂権弥、横山某、和田某らが、相原高平の御殿山城に、盛重の軍を迎えて合流し、まず、郡内第一の豪族神石郡執行職及び志麻里庄内常光村、龜石村地頭職龜石城主岡田孫八郎員盛を攻めた。

と、この城は内藤実豊の舎弟清実を置いて守らしめ、進んで志麻里庄上村及び光末名光信名の地頭職馬屋原備前守忠宗と、その一族同姓四郎兵衛尉成宗を討つべく同村有井城と梨迫城に押し寄せた。

しかし、この時忠宗は成宗と共に六波羅の求めに応じて笠置攻囲軍に加わっていたため、留守兵の中に走って急を告げるものがあり、残る留守兵は忽ち降伏した。

これより先、馬屋原一族は桜山公と昵近であったので、急を聞いた忠宗は急遽帰国して桜山軍に加わり、盛重に従い忠勤を励み、忠宗は正平十七年(一、三六二)京都において討死した。ついでこの時木津和城主木津和又三郎助治を攻めたともいうが向背は明らかでない。

(以下次回)

(注・名) 平安中期以降、中世の名田の名残りて集落や組の名)

参考 統郡誌・備後史談

中世の郷土 ⑬

(承前)

岡田員盛を討ち、馬屋原忠宗・成宗を従えた平太郎盛重は、北進して新免村(油木町新坂)に入り、同村木路田城主村田左衛門尉兼光を攻めた。兼重は降伏して盛重に従いのちには勇名を馳せたという。

かくして神石一円を打ち従えた桜山軍は、備中境の有木村に集結し、ここより備中平川村に攻め入り、北条党と交戦多大の戦果をおさめた。

ここにおいて桜山軍は兵を三手に分かち、相原高平有木頼弘・高尾元弘及び内藤軍の一部を備中勢に備えて居残らしめ、内藤河内守は桜山の命により桜山本城に入り、のち安芸方面に進撃した。大将盛重は日隈若狭守・村田左衛門尉・同左衛門三郎・馬屋原忠宗・同成宗らを伴い桜山城の守備についた。

中央においては幕府軍(北条軍)の動きが早く、後醍醐天皇は元弘元年八月二十七日笠置に御潜幸になったが、まもなく笠置落城、天皇は捕えられて隠岐島に配流となった。楠正成は赤坂城に天皇を迎えるべく準備をしていたが、このことも空しく二十日に及ぶ激戦のち、城に火を放ち自らは自害を装って一時姿を晦ますに至った。

ここにおいて、中国地方の笠置攻囲軍に加わっていた北条党の将兵は急ぎ郷里に帰り、失った城地奪還に狂奔し、さらに桜山の本據に迫らんとした。

備中に居残り北条軍に備えていた相原・有木・内藤・高尾・江草の諸勢は、帰郷勢を迎えて勢いを増し反撃してくる備中勢をよく支えていたが、押され押されて後月部三原村入・杖立・花洛附近まで後退し、この地で激しい攻防戦を繰り返した。しかし、遂に守備陣の一角有木頼弘敗退するに

至って、桜山軍は桜ヶ峠附近に後退し、この地で喰い止めようとしたが敗勢おおうべくもなく、内藤実豊の子某がここで討死し、遂に退いて内藤の本城である新城山城に集結した。しかし鋭意態勢の立直しをはかったがならず、更に、内藤清実の守る龜石村大寄山城(龜石城)まで退き、ここに高尾・福永方面から敗退してきた高尾九郎次郎同小十郎らと合流して態勢を整え、相原高平は御殿山城に帰り、両城相呼応して北条軍を支えたが、いかにせん衆寡敵せず、大寄山城は内藤清実以下家臣殆ど討死して落城した。相原・高尾らは生ける将士を集めて南下し桜山本城に向った。

寄せ手の軍勢は奴可入道西阿、従うは山内刑部と北条部備後の士分・雲州佐々木の郎党ら三千余人が安井村に本陣を置き、南方には神谷川を隔てて芦原駿河が八百余旗を以て天王社の杜に陣取り、十月十三日拂曉より南北相呼応して攻め寄せた。

桜山本城の慈俊は少しも騒がず、約六百の城丘をもつて、敵が城下に近づくを待って一度に狭間を開き、仰いで、攻める敵の頭上に大木・大石を雨霰と落しかけ、遠くは射落し激戦午の刻頃(正午ごろ)まで続き、寄せ手は死傷も夥しく戦意衰えたかに見えたので、折しもよしと城兵討つ出て乱戦となり、奴可軍は葦原軍と共に神谷川を渡り一旦退いた。されども敵は多勢味方は小勢、やがてまた新手を加えて勢を立て直し攻め寄せて来た。

この頃、さきに慈俊が正成の許に遣わした使者光成新二郎興家が帰り来たって、

赤坂落城、正成戦死(実は正成計略上の偽死)、天皇の行方すらも判り難き由を報じたので、慈俊大いに落胆し城兵の意気頓に沮喪した。慈俊勇を鼓し城兵を励まし孤城を守って戦ったけれども、賊鋒いよいよ鋭く、義旗光りを失い刀折れ矢盡きて、遂に城に火を放ち、その北方観音堂において妻子を刺殺し、みずからも自刃して果てた。時に慈俊三十九歳であった。

この時小畠村においても桜山の一党が八幡神社に立て籠り社に火を放ったことが、宝暦八年(一、七五八)の寺社由来書の中の小畠八幡宮「欽記」の中に次のように記されている。

(前略)元弘年中桜山四郎入道当国閉籠一宮吉備津宮放火自害之節其余族籠当社放火而宮殿宝物旧記等悉灰燼依之不詳矣(後略)

(以下次回)

(返り点は筆者)  
(参考) 統郡誌、桜山朝臣詳伝、備後史談、宝暦八年寺社由来書)

# 中世の郷土(四)

(承前)

この元弘の乱において桜山軍に加わって戦った父木野御殿山城主相原筑前守高平は、隠岐島に幽閉中の後醍醐天皇を迎えんとして御殿山城を築いたが、天皇が山陰を御還幸になったので果さなかった。この城を御殿山城と呼んでいたが幕府に押されて五殿山城と改めた。

以上のような説も伝わっている。

## 四、服部合戦

その後観応二年(一二三五)には馬屋原但馬守正国が服部合戦に参加したことが、神石郡誌統編に「備後太政記」の記事として載っている。ここに転載してみると、

『「太平記に載」としての

備後太平記の記事に、「人皇九十八代崇光院観応二年卯年去る程に越前守師泰は、貞和六年六月廿日都を立ち同七月廿七日の暮程に備後恵蘇郡「江の河」に着く。それより合戦始まる」とある。既に観応二年正月十三日までの服部合戦に、馬屋原但馬守正国(小畠の城主)。村田左衛門、同名次郎・高尾九郎元長等が加わり、時に馬屋原但馬守先陣として何の会釈もなく数千騎の中へ真一文字にかけ入り敵を二、三騎切つて落したことが載せてある」と記されている。しかし、

この記事はにわかには信じ難い。何故なれば馬屋原但馬守の九鬼城築城が永正六年(一五〇九)と伝えられて居り、服部合戦の観応二年(一二三五)とではその間一五八年の開きがあり、同一人物とは考えられない。若し同一人物とすれば、服部合戦作加か九鬼城築城の

時期のいづれかが誤伝といふことになるが、石山合戦の折近田村正光寺と馬屋原但馬守が本願寺へ送った鉄砲・金子・兵糧米等の合力に対する本願寺から軍忠状(天正二年三月)が正光寺に残つて居り、服部合戦参加の方が誤伝と思われる。

## 五、志良賀・吉岡合戦

氏祖の霊を祀り吉岡大明神と稱していた。今は久留美八幡神社に合祀されているという。

神石郡誌統編には、右の志良賀氏のことについて、「備後史談」によるとして次のように記している。

住していたので「志良賀」と記されていたものである。寛正年中(一四六〇—一四六四)志良賀佐助なる人が、志良賀大明神と号し、神として天神社に合祀され浪士神佐介霊神とよばれていたと記されている。

以上の如く郡誌統編に書かれていた。

志良賀は白髪で、志良賀氏は白髪部の長である。白髪部は白髪武国押稚日本根子天皇(おしわかやまとねこのみこと)(諡清寧)に嗣子がなかつたので、その名を後世に残すべく各国に遣わされた御子代部である。のち、光仁天皇の御諱が白壁であったから、白髪部を真髪部と改められた。

備中には白髪部・真髪部ともに多く、霊異記には備中小田郡の白髪部猪磨のことが載っている。

時安の白髪部は、置かれたものか他から移住して来たものか詳かではないが、要するに白髪氏が時安に居

五、志良賀・吉岡合戦 応永年中(一三九四—一四二八)楠氏の一族と稱するものを吉岡と改め時安久留美谷に隠棲し、応永十三年この地の豪族大歳長者今井興四郎と戦い、これを敗つてその領地を奮い、また、同地の郷士志良賀佐助とも数年に亘つて領境を争い、遂に寛正四年(一四六三)三月これを討つてその所領をも手に入れた。後年土地の人々が志良賀の霊の崇りを懼れて志良賀大明神として祀り、今は深草天神社に合祀されているという。

これにさきだち吉岡氏は

以上で志良賀・吉岡合戦の項を終る。次回は項を改めて述べる。

註、御子白部、大化前代の皇室の私有民、天皇が皇子の養育費をまかなうためなどで国造の民をさいて設定したものの。

霊異記、日本霊異記のこ

と。弘仁十三年(八二二)頃作られた仏教説話が主体の説話集。因果応報の教訓めいた本。

(引用、又は参考にしたもの。神石郡誌。神石郡誌統編正光寺蔵石山合戦軍忠状)

中世の郷土 (五)

六、新興佛教(鎌倉仏教)

保元・平治の合戦に始まり、平氏の没落に終わる戦乱の連続と、それに加えて相次いで超こる飢饉・天災をまのあたり見、身をもつて体験した十二世紀末の世の人々は、それが仏教の予言する、末法の世界(正・像・末三時の末時のこと。末世ともいわれる。)の到来だと信じないわけにはいかなかった。特にそれを痛切に感じたのは、すでに没落の道を辿りつつあった貴族たちであった。

そうした人々の切実に求めたものは、苦しみ深く迷い多い今の境界をのがれて、けがれなき平和な世界に住みたいということであった。いわゆる欣求浄土(きんぐせうじやうど) 壓離穢土(おんりていど)の思想であった。

このような時期、こうした人々の願いに答えるように興ったのが新興仏教(鎌

倉仏教)である。法然(源空)の浄土宗、親鸞の開いた浄土真宗、一遍(智真)の開いた時宗、栄西の臨済宗、道元による曹洞宗、日蓮による日蓮宗等である。これらはみなこの時期、すなわち十二世紀末から十三世紀初めにかけて興ったものである。

右のような思想風潮と、これによって興った新しい仏教は、漸次草深い農村にも浸透していった。

私たちの郷土においても十三、四世紀の頃、多くの寺院が相次いで創建されている。列挙してみると、大矢・光徳寺(一一九九) 時安・光福寺(一二三四) 父木野・金蔵寺(一二一五) 時安・教西寺(一二一五) 平忠・平忠庵(一二三二) 龜石・南泉寺(一二七二) 父木野・法雲寺(一二八一) 高蓋・長善寺(一二九五) 木津和・願成寺(一二九五) 階見・長命寺(一三九五)

以上の如くである。次の寺は創建の時期がこの時期

(十二、三世紀)ではないが附記して置く。

阿下・星居寺(六五〇) 小島・岩屋寺(九三九、ま

たは二九五) 上・正覚寺(一四六八) 井関・善福寺(一六五四) 上・瑞円寺(一七二〇)ころ

第二節 室町時代

一、概説

建武の中興が成った建武二年(一三三五)から、慶長八年(一六〇二)徳川家康が江戸に幕府を開くまでを室町時代という。

建武の中興によって、一時政権が王朝に帰したこともあったが、南北朝の対立から応仁の乱にかけて、公家勢力は武家勢力にまったくおさえられて、荘園は守護大名に侵略され、次第に衰えていった。応仁の乱以後各地に武将が割據して、世は戦乱に明け暮れるいわゆる戦国時代となり、織田・豊臣を経て家康の天下統一となる。

二、郷土の豪族と戦国時代

この時代の郷土のありさまを知る資料はほとんどないが、郷土の豪族たちが、元弘の乱や戦国時代の争乱に備えるため、各地に相次いで築城したことが伝わっている。今郷土に残る多くの山城跡は、ほとんどこの時代築城のものである。列挙してみると、

父木野・五殿山城・杉原筑前守元弘(一一三三) 小島・固屋城・馬屋原四郎兵衛成宗(一一三三) 龜石・大寄山城・内藤河内守実豊(一一三三)

上・有井城・馬屋原備前守貞宗(一一三三) 上・梨迫城・馬屋原藏人宗正(一一三三)

高蓋・門田城・門田弥石衛門(一一三九) 時安・丸山城・渡辺筑後守豊綱(一一三九) 父木野・石屋原城・入江大蔵太夫正高(一四五五)

小島・九鬼城・馬屋原但馬守正国(一五〇九) 龜石・大谷城・大内大和守直重(一五三〇)

時安・大蔵山城・金山興四郎清高(一五三四) 大矢・大矢城・馬屋原中務大輔成高(一五三五) 高蓋・大殿城・藤原上総大丞(一五三五) 高蓋・高蓋城・有地九右衛門盛信(一五三五) 高蓋・峠城・酒井萬之助(一五三五) 高蓋・清滝城・瀬尾甚右衛門(一五三五) 父木野・大石城・入江大蔵大輔正高(一五三五) 高蓋・倉掛城・城主知れず(一五三五)ころと思われる) 等がある。なお次の二城は築城年代が室町時代よりもかなり以前のものであるが一緒に挙げて置く。

龜石・大壺山城・岡田但馬守員正入道(一一九二) 木津和・木津和城・木津和太郎興助(一一九二) (以下次回)

参考

神石郡誌・神石郡誌続編・備後史談・備後古城記・三和小歴史年表・森末義彰日本史の研究

中世の郷土 (六)

(承前)

節記郷土の諸城の將士たちは、厳しい戦国動乱の世を生きたために、尼子・大内・毛利など名ある武將について、所領安堵をはかるうとした。ある時は尼子に属し、ある時は毛利に詫びを入るるなど、優勢な戦国大名についてその庇護のもとでこの時代を生き抜こうとした。

その事の例として、九鬼城の城主馬屋原とその一族の去就について、郡誌統編に引用されている「西備名正」の記述を抄出して次に掲げてみよう。

九鬼山城、孤兵なり。四方皆田圃

馬屋原但馬守正国

大内旗下。永正年中(一五〇四〜一五二〇)上村有井城にあり。大永七年(一五二七)能求山岩屋寺建立す。其頃雲州尼子、防州大内家

と備後国を争い、しばしば戦へども勝敗決せず。其砌暫、尼子に従ふ。舎弟元政、大内家に従わんとす。故に不和の事おこり正国宥井城を去って平川に寓居す。平川、毛利家に属し功あり。毛利家に断り正国を志摩利にかへす。故、元政も毛利家に従ふ。因茲正国当城を築きて移れり。

馬屋原蔵人允宗治

宗治尼子に属し居りしが、故ありて大内方となり毛利家に従ふ。故に尼子新宮党をして備後に打入らしめ、北方を攻め磨け、九鬼城を攻む。宗治微勢にして叶はず大矢に退きぬ。因茲尼子番兵を入置き引退く。宗治大矢にあつて固屋・有井に牒し合せ番兵を追い退け帰城す。

同 蔵人允宗正

宗治舎弟元政石州に移るによつて有井城に入る。

馬屋原左衛門太夫正成

後、彈正左衛門成広と改稱す。天正三年(一五七五)毛利備後に打入給ひ、宮下

野守入道が宮城を攻め給ふ時に入道近隣の土に加勢を乞ふ。馬屋原一族、先に大内に属すると言へども、一族たるが故に見捨がたく、左衛門太夫、四郎兵衛尉、監特等宮城に加勢す。然る処、下野入道軍中に卒去しける故城中一和せず、近隣の諸士出城しければ、宮若狭守、同宮内少輔、若年と言ひ、孤となり、隆參退去しけるにぞ、退ひて毛利へ前過を佗(詫であらう)び帰せん事を願ふ。毛利候是を免し給ひ、本領安堵せしめける。因茲本州の諸士、比時大半毛利家に服従せり。尼子是を憤り備後国を一円に帰服せしめんと、尼子式部太夫を將として三千余騎にて同しき六年三月雲州より直に備後に打入り、毛利家に属せし諸城を攻む。城主等或は降り或は退去し、諸勢志摩利に押入り、九鬼山、固屋、有井三城を攻む。因茲宮城に毛利家の番兵として古志景勝多勢にて籠り居しかば、彼城に援兵を乞

ふ。古志勢を出して龜石に陣す。尼子勢を四手に分けて攻戦す。或風雨の夜、三城並に古志と牒し合わせて夜討をかけしかば、尼子大いに乱れて敗走しけれども、元より多勢なれば、又守りかへして攻め囲む。然る処、毛利候西方の諸氏に命し、多勢を以て援はれるにより、尼子勢雲州に引入らんとす、三城是を察して打出、諸勢と俱に追討して首級を獲たりと云ふ。比外諸処の軍従ふ。

以上郡誌統編に載せられた西備名区の中から抄出掲載したが、また、九鬼城の技城と言われた大矢城の川上氏についても、同書に次の如き記述がある。

大矢城

川上李之進政秀

大内義隆の旗下、龜石より移り、後、甲奴郡龜谷に移る。尼子芸州吉田を攻めし時、大内の加勢に従ひ、春

(青)光猪山にて討死す。子息五人有名字欠嫡男某防州に移り、次男は毛利候に

従ひ、播州合戦に上月にて討死。残る三子舎弟防州に移るの時比に止つて子孫あり。(以上引用文は郡誌統編掲載のまま)

とある。以上馬屋原・川上二氏について、郡誌統編から転載したが、これらの記述によつて、この時期郷土の諸將士が、みずからの保身のためにいかに心を配つたかを窺うことができる。

これら諸子の居城は、戦国時代の終り天正十年(一五八二)の秀吉の山城檢地につづく山城廢止令によつてすべて廢城となり、今では四百年の星霜の彼方に埋もれて、昔をしのぶすがもなくなくなったものが多いが、なかには郭や空堀りが勢溜り、あるいは天水井戸跡や崩れかけた石垣、繁茂する矢竹など、わずかに昔の面影を残すものもある。

(以下次回)

(参考 郡誌統編・西備名区・神石郡誌)

# 中世の郷土 (七)

いる。  
次にその遺牌を掲げてみよう。

岩屋寺蔵の分

初代正国(久木城主)

前但州太守香林浄梅大居士

享祿元子八月十日歿

二代宗治

前侍中大岳宗綱大居士

弘治三巳四月三日歿

三代正成

前左金吾孝導賢忠大居士

天正五丑十月十五日歿

四代元正

前備州太守清林宗梅大居士

文祿二巳七月十八日歿

五代重治

前備州太守靈山教化大居士

元和二辰十月二十五日歿

重治室

桂室妙教大禪定尼

元和五末七月七日歿

以上が岩屋寺に伝わる久

木城主馬屋原氏の初代から

五代までと五代重治夫人の

遺牌である。

安養廃寺に伝わるもの

(その一)

自先院殿前上州太守大勇全

功大居士 尊位

永祿八乙丑二月九日

左近太夫政次公父

馬屋原土佐守政重

(その二)

瑞円院殿前周州太守大安智

勇大禪定門 尊位

(その三)

瑞円院殿前但州太守宗綱大

居士 尊位

以上三人のものである。

これ以外にもあったのかも

知れないが、なにしく廃寺

のこと、他は紛失してこれ

だけが残っているのかもわ

からない。(その一)のもの

に馬屋原土佐守政重とあ

ることから、前記九鬼城の

馬屋原氏と同族の、有井城、

梨迫城の馬屋原氏のもので

はないかと思われる。

三、犬塚合戦

この時代、郷土の将士との関係は不詳であるが、郷土を戦場とした戦いに犬塚合戦がある。この合戦は参加将士の一人が池で血刀を洗ったというので太刀洗伝説ともいわれるものである。神石郡誌に次の如き記述がある。

「明応四年(一四九五)

出雲富田城に、尼子経久威

を近国に振り、亀井能登・

牛尾豊前を編禰ひんねとし、三刀

屋・赤穴・三沢等の諸將を

以て備後北鄙を侵し、永正

元年(一五〇四)六月中旬

神石諸城を攻略し、桃谷多

賀山に陣し南方の動勢を窺

ふ。山南の城主渡辺越中守

兼源三之を聞き三百余騎を

以て出でて中島に陣し檄を

募兵に伝ふ。雲州勢は敵小

勢と侮り唯一揉みと待ち憂

けしが兼は奇謀を廻らし能

く戦ふ。然れども衆寡敵せず

勝算なし。時に安芸毛利

興元及び備後山内次郎三郎・和知入道元長・尾腰左衛門・江田源八兵衛・木梨民部等

一千余旗にて後話し、旗差

物風に靡き喊声天地を動か

し芦田郡常に於て大いに戦

ふ。接戦数合會々風烈し。

尼子の陣に火を放ち奮闘

す。雲兵大に擾れ利あらず

して引退く。兼之を追ふて

犬塚に進み奮戦して敵首数

級を獲て帰る。其時太刀を

洗ひし所今の太刀洗血の池

として残る。」

とある。

但し、この太刀洗血の池

伝説は、他に二説があるこ

とを附記して置く。(文中

の読みがなは筆者)

(この頃終る。次回は石山

合戦と郷土について)

(参考 神石郡誌・郡誌統

編・西備名区)

前回戦国時代の郷土の豪族馬屋原氏一族と川上氏の去就について述べたが、その他の諸氏についてはそうした資料がない。

多くの城とその城主名は前に記したが、それらがその時代を如何に生きたかの資料がない。しかし、これらの諸将士もだいたい馬屋原氏川上氏らと同じように、ある時は右しある時は左して、動乱の時代を何とか生き抜こうと心を砕いたであろうことは間違いないからうが、その結果は栄枯さまでであったであろう。今にしてみればすべて一場の夢に過ぎまい。ただ松風のさわぐ城跡と、岩屋寺や安養廃寺に残る金文字の遺牌数本がわずかに昔を物語って

# 中世の郷土 (八)

## 四、石山合戦と郷土

織田信長の石山本願寺攻めは、天正二年(一五七四)

より六年間、石山本願寺を包圍して糧道を絶つ作戦をとったので、本願寺の顯如上人はこの救援を毛利氏に乞うた。毛利氏はこれに応じて、兵糧・軍資金・武器を石山城に送りこむこととし、領内の真宗寺院及び各地の城主にこれを命じた。

郷土の九鬼城の城主馬屋原但馬守も、近田村(現油木町近田)の正光寺と連携をとり、鉄砲一〇〇挺・金子二〇〇両・米二〇〇俵の調達ができた。この内鉄砲一〇〇挺と米金の一部は但馬守自身の寄進であることが、後掲の但馬守の書状でわかる。

この物資の輸送には但馬守がこれにあたり備後鞆の津に運ばれた。但馬守は自ら陣頭指揮して、「進者住

生極楽」「退者無間地獄」と大書した旗を先頭に、駄馬百余頭の背により無事鞆の津に送った。鞆の津からは毛利氏の依頼を受けた村上水軍が輸送にあたったと言う。

この時の礼状でもあり、受取状でもある「軍忠状」が、正光寺に寺宝として保存されている。次に掲げよう。

- 一、鉄砲 百挺
- 一、金子 貳百両
- 一、米 貳百俵

但し四斗三升入

本願寺為軍用右之通御合力被申候御門跡様江及言上候処至而忠節之助情不淺被思召也依右後日何時成共願望之儀有之候節は比由可被申出候其節望之通御免被成下候間比上随分御加情可被申様被仰出候為後々日如件(読み下し 本願寺軍用と為て右之通り御合力申され候御門跡様へ言上に及び候処至つて忠節之助情浅からず思召さる也右に依り後日何時なりとも願望の儀これ

あり候節は比の由申し出でらなべく候其の節望之通御免なし下され候間比の上随分御加情申さるべき様仰せ出でられ候後々日のため件の如し。読み下し文筆者)

天正二年酉三月三日

刑部卿法橋

頼兼卿

上野法眼

正秀卿

備後国神石郡近田村

正光寺了達坊

同小畑村九鬼之城主

馬屋原但馬守殿

とある。

またこの時、この合力について連絡のために、但馬守が正光寺に出した書翰が正光寺に伝わっている。これも次に掲げてみよう。態々以使礼呈一輪候(極暖和之節相成候処其御地御手安可被成御寺勢安否承度候随而比方無替在城二居申候御安堵可被下候然者阿府小田家悪心之思立与大阪御本寺江被〇〇申上左右有之右ニ付末々惣門徒江兵

手柄相待ち入り候。恐々謹言

小島九鬼城主

馬屋原但馬守

二月拾日

近田村正光寺

御院主

以上のような書翰が伝わっている。鉄砲百挺と他に米や金の合力をみると、馬屋原氏の勢力はかなり大なるものであったことが窺える。(以上この項を終わる)

(今回で八回に亘つて、中世の郷土について述べてきました。この時代の郷土の史料は非常に少なく、以上をもつて一応終わります。長きに亘つてお目通し頂きましたことに対し、深くお礼申し上げます。できれば次は近代の郷土についてみていきたいと思います。松井 正夫)